

編集後記

- ◇ 農林水産省は2月5日に「平成30年産春植えばれいしょの作付面積、収穫量及び出荷量」を公表した。これによれば、全国の春植えばれいしょの作付面積は7万4千haで前年産に比べ500ha（1％）減少し、収穫量は221万5千tで14万t（6％）減少した。また、10a当たり収量は2,990kgで、前年に比べ170kg（5％）下回ったが、これは、作付の多い北海道において、6月以降の天候不順により、着いも数が少なく小玉傾向となったためとしている。なお、こうした減収の卸売価格への影響は、秋口には平年を若干上回ったものの、31年に入ってから平年を下回る日が続く、生産者には減収に加え価格安と厳しい状況となっている。
- ◇ 日本農業新聞が毎年調査している「野菜のトレンド」の2019年版が1月7日に紙面で公表された。この調査は、野菜の売れ筋動向について、スーパーや生協、卸売会社など51社から回答を得たもので、野菜の中でトップに掲載されているのがサツマイモである。これを引用すると、『サツマイモの人気は19年も続きそうだ。多くのスーパー店頭で焼き芋機が設置され、課題だった夏場の販売でも、冷凍焼き芋が人気を集める。"しっとり系"の人气が高く、中でも注目を集めたのが「シルクスweet」だ。12年に発売された品種で、「甘味が強く、スイーツ感覚で伸びそう」（関西地方の卸）などと、人気の広がりを予想する。』とのことである。今後ともいも類が売れ筋のトップを走ることを期待したい。
- ◇ 本号No.139の特集では、「ばれいしょ加工品中のアクリルアミドの低減について」と題し、4名の方に寄稿頂いた。アクリルアミドは食品中でアスパラギンと還元糖が加熱される時に生成する物質で、その発がん性の健康リスクが懸念されているところである。この物質は、ばれいしょ加工品中でも条件によって生成する可能性があるため、その低減対策が求められており、アクリルアミドを生成しにくい品種の育成導入、生成を抑制する調理方法の改善等が提言されている。こうした対策の推進により、ばれいしょの名を高めていきたいものである。
- ◇ ジャガイモ新技術連絡協議会と農林水産省が共催する「ゲノム編集技術に関する勉強会（ジャガイモ）」が2月5日に大阪大学で開催された。ここでは、ゲノム編集の現状と知的財産権のポイントなどが紹介されたが、耳目を引いたのは、次期研究プロジェクトでは、「貯蔵中に芽の出ないジャガイモの作出」が検討されているとのことである。5年間での開発成果が待たれるところである。

（鈴木 昭二）

いも類振興情報 第139号

2019（平成31）年4月15日発行

定価 1部 500円
年間購読料（季刊） 2,000円

発行 一般財団法人 いも類振興会

〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41 ヴィップ赤坂303
TEL 03-3588-1040 FAX 03-3588-1225

E-mail: imoshin@fancy.ocn.ne.jp
郵便振替 00130-1-110152

印刷 株式会社丸井工文社